

2026年度 14期

「土佐日記」「蜻蛉日記」を読む

日時： 6月22日（月） 10時~11時50分
場所： 高槻センター街ビル
講師： 現代歌人集会理事長 林 和清先生

テーマ： 土佐日記 3

■ 行程

1月23日（室津）から2月16日（帰京）まで

23日 室津を出港したが海賊の恐れ、梶取（船長）が神頼みをする
29日 鳴門の土佐の泊へ
30日 夜中は海賊は行動しないと聞いて阿波の海峡を渡り、和泉の灘へ
4日 天気予報を外す梶取
5日 和泉の灘から住吉へ
遭難の回避を住吉の明神に祈る
6日 難波へ
7日 淀川を上る
9日 渚の院を見て在原業平の歌を思い出す
11日 山崎に至る
16日 桂川を渡る
16日 帰京



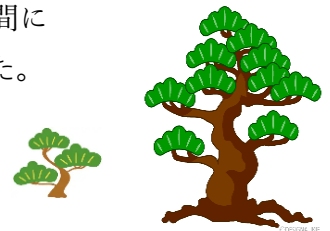
紀貫之



■ 帰京した貫之は

無事京に戻ることができ嬉しいが、長い留守の間に荒れ果てた我が家を見ると悲しみが湧いてくる。そのボロボロになった家の庭にあった松の木も土佐に行っている間に半分くらい枯れてしまっていた。かと思うとつい最近生えた若松もあった。この若松を見た貫之は娘のことを思い出す。

生まれしも還へらぬものを我が宿に
小松のあるを見るが悲しさ



ここで生まれた我が子は帰ってくるができなかった。なのに我が家に育った小松があるのを見るとなんと悲しいことだ

見し人の松の千歳にみましかば
とほく悲しきわかせましや

亡くなったあの子が松の千歳にあやかって長生きするのを見ることができたならば、土佐での遠く悲しい別れをしたらどうか、いやしなかつたらどうか

娘も庭の松のように長寿だったら・・・と娘を偲びしんみりと日記は終わる。

■ 林先生の軽快な講義で土佐日記を読み終わりました。道中海賊に怯えたり、悪天候で足止めをくらったりする苦労や人間味のある日常が描かれている一方で、亡き娘への深い哀愁が切々と綴られていました。次回からは藤原道綱母の「蜻蛉日記」を読み解きます。